（思想・哲学）

【No.　　】 諸子百家の思想に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. 孔子は、人間として望ましい心のあり方を「仁」と「礼」という言葉で表すとともに、「孝悌」の重要さを説き、君子と臣下の関係のみならず、親子や兄弟の間であっても親愛の情に流されることなく、厳格な身分秩序による主従の関係を保つことを求めた。
2. 孟子は、人間は生まれながらにして「惻隠」、「羞悪」、「辞譲」、「是非」の心が備わっているとして、性善説を唱えた。孟子はこの四つの心を四端と呼び、これを養い育てていくことで、人間は「仁」、「義」、「礼」、「智」の四徳を実現することができると考えた。
3. 荀子は、孟子の性善説に対し、性悪説を唱えた。彼は数ある人間のうちには、私利をむさぼり、他人を憎む性質をもつ者が出てくるものであるとして、そのような者は矯正が不可能であり法律と刑罰によって社会から排除し、社会の安定を取り戻す必要があると説いた。
4. 老子は、道徳が廃れ、混乱した社会を「大道廃れて仁義あり」と表現し、社会に道徳の思想を再度もたらすためには、人々の中にわき起こる「仁」や「義」といった思想を大切にすることが重要であると説いた。この考えを受け継いだ荘子が道教を生み出し、広く民衆に信仰された。
5. 墨子は、儒家の考え方を基に兼愛交利説を唱え、性善説と性悪説のいずれかに偏ることなく、中庸をとることが大事であるとした。また、非戦論を唱えるとともに、その実現のためには身分にとらわれない信賞必罰の精神に基づく統治により、国内の安定を図ることが重要であるとした。

【正答　2】

（歴史学）

【No.　　】 江戸幕府の支配体制に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. 初代将軍徳川家康は、大名を厳しく統制するために、武家諸法度において大名の居城を一つに限ると定めるとともに、転封(国替)、減封(領地削減)、改易(領地没収)を強行した。彼の死に伴って、幕藩体制の安定化を優先して転封・減封・改易は抑制されるようになったが、第８代将軍徳川吉宗による将軍権力の強化とともに再度頻繁に行われた。
2. 第５代将軍徳川綱吉の時代に参勤交代が制度化され、大名は親藩、譜代、外様の別や、江戸からの距離にかかわらず、３年おきに国元と江戸を往復し、江戸に藩邸を構えて妻子を住まわせることが義務付けられた。また、大名は、江戸城などの修築や各地の河川工事の手伝いを命じられることもあり、江戸滞在や移動に伴う多額の支出を強いられた。
3. 幕府の常設の統治機構として、政務全体を統括する大老、大老を補佐する老中、大名を監督する大目付、旗本・御家人を監察する目付、寺社を管轄する寺社奉行、江戸の市政を担当する町奉行などの役職が置かれた。これらの役職について、原則として、大老及び老中には親藩大名が、大目付・目付には譜代大名が、寺社奉行・町奉行には旗本が、それぞれ就任した。
4. 幕府の財政基盤の柱の一つは、全国の石高の半分以上を占める幕府直轄領にあったため、現地にはそれぞれ郡代ないし代官を置き、全体を勘定奉行に統括させた。また、幕府は貨幣の鋳造権を独占しており、発行する金・銀・銅(銭)の三貨の交換比率を厳格に固定させることで、安定的に莫大な収入を得ていた。
5. 幕府は、天皇に禁裏御料、公家に公家領を与えて一定の収入を保証し、朝廷の官位叙任・改元・改暦の権限を残した。その一方で、幕府は、朝廷が独自に政治的な行動をしたり大名に利用されたりしないよう、禁中並公家(中)諸法度を発布して朝廷内部の秩序を定めるとともに天皇・公家の生活や行動を規制し、京都所司代を置いて監視させた。

【正答　5】

（文学・芸術）

【No.　　】 西洋の作家とその作品に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. ロマン・ロランは、商業都市リューベックを舞台にした『チボー家の人々』で、商人としての才覚を持ち、繁栄していた一族が、徐々に芸術への傾倒を深めて現実生活への対応力を失い、没落していく姿を 4 代にわたって詳細に描き、人間存在に対する不安を描いた実存主義文学の祖として高く評価された。
2. ボリス・パステルナークは、スターリン時代のシベリアを舞台にした『嘔吐』で、極寒のラーゲリ（収容所）で重労働に服する囚人が、目の前の小さな出来事に努力し満足しながら絶望せず生き抜くさまを描いたが、共産主義国家における生々しい生活描写を問題視したソ連政府当局からの圧力により、ノーベル賞の辞退を余儀なくされた。
3. アルベール・カミュは、第一次世界大戦前後のパリやジュネーブを舞台にした『異邦人』で、裕福なブルジョア家庭に生まれた兄弟を主人公に、優秀な医師となった現実主義者の兄の生き方を、父親に反抗し、反戦運動に身を投じた弟の青春と対比しつつ描いたことから、第二次世界大戦中は反戦作家としてヴィシー政権から迫害を受け、米国に亡命した。
4. ギュンター・グラスは、自由都市ダンツィヒ（グダニスク）を舞台にした『ブリキの太鼓』で、幼い頃に自らの決意で身体的成長を止めた主人公の回想の形式で、猥雑・奇怪なイメージを交えつつ第二次世界大戦から戦後の混乱期における人々の生活や死を描いたが、後年になって、グラス自らがナチス武装親衛隊との関わりを発表し、注目を集めた。
5. アーネスト・ヘミングウェイは、アパルトヘイト時代のケープタウンを舞台にした『日はまた昇る』で、教え子の告発で職を失った大学教授が、娘の経営する農園に身を寄せて再生の道を模索するが、更なる出来事で日常を突き崩された末、自分の人生を見つめ直す様を克明に描き、アパルトヘイト根絶に向けた連帯のシンボルとして、国際的に高く評価された。

【正答　4】

（人文地理学・文化人類学）

【No.　　】 文化人類学の代表的な研究に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. 思春期における子供たちの不安定さは、西洋社会に特有のものであり、急激な産業化など社会や文化の所産であると考えられてきた。しかし、 M. ミードは、『サモアの思春期』において、サモアの少女たちが西洋社会の子供たちと同様に葛藤を抱えながら成長していく様子を描き、心身ともに急激な成長が起こる思春期の不安定さは人類一般の真理であると論じた。
2. C. レヴィ＝ストロースは、『野生の思考』において、万物に霊的存在を認めるトーテミズムを宗教の原初形態とみなした。精霊あるいは神は、常には山河自然をはじめ人工の構築物や人間の身体に潜んでいるが、非日常の超自然の力として善悪いずれにも働くとし、宗教は、トーテミズムを土台として多神教から一神教へ進化すると論じた。
3. M. ダグラスは、『汚穢（けがれ）と禁忌』において、「汚穢」と「禁忌」という文化の型を提示した。すなわち、人々からの非難や嘲笑などが行為に対する外的な制裁として機能する日本の文化を、汚穢の文化としたのに対して、キリスト教の影響による内面化された禁忌の意識が倫理の基準として機能する西洋文化を、禁忌の文化とした。
4. M. モースは、『原始文化』において、米国の先住民の間で見られる儀礼的贈与交換であるポトラッチに注目した。ポトラッチの主宰者は、気前の良さや寛大さを誇示するため、食べきれないほどの食物や貴重な財を振る舞うが、受け取った者には返礼と残りの再分配の義務がある。このことから、人間社会には、贈与・返礼・再分配という贈与の義務的三原則が働いているとした。
5. 観察者が被観察者と同じ社会生活に参与して内側からその実態や実情をつぶさに観察する方法を参与観察という。その先駆事例として、 B. マリノフスキーがニューギニア沖のトロブリアンド諸島で行った、クラと呼ばれる儀礼的交換制度の調査研究が挙げられる。彼は、この調査結果を『西太平洋の遠洋航海者』としてまとめた。

【正答　5】

（心理学）

【No.　　】 防衛機制に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. 人は、強い葛藤を感じたり、身体的・社会的に脅威にさらされたり、自己の存在を否定されたりしたときに、超自我の働きにより心の安定と調和を図ろうとする。こうした無意識のうちでの調整機能を防衛といい、その様々な手段を防衛機制という。
2. アンナ・フロイト(Freud, A.)は、父親であるジグムント・フロイト(Freud, S.)が明らかにした防衛機制を発達段階に応じて整理、分類した。そのうち、思春期に顕著なものとして、知性化と投影性同一視を挙げている。
3. 防衛機制のうち特定のものが常習的に柔軟性を欠いて用いられると、病的な症状など様々な不適応状態として表面化することがある。ただし、防衛機制自体は、不適応状態に陥っていない人にも認められる心理的作用であり、通例、幾つかの防衛機制が同時に組み合わされて用いられることが多い。
4. 自我が受け入れることが苦痛あるいは危険であるような考えや衝動が意識に上らないように防ごうとする防衛機制を、否認という。これは、外からの脅威に対する防衛と異なり、内的な欲求や願望を意識から排除する働きであり、性的・攻撃的な感情や劣等感などが対象となりやすい。
5. 罪悪感を抱くような行為の後、それとは正反対の行為を行うことで不快な感情を取り除こうとするのは、反動形成によるものである。攻撃性をスポーツのような社会的に容認されるものに変容させて欲求充足を図ることは、反動形成がうまく機能した例といえる。

【正答　3】

（教育学）

【No.　　】 教職に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. D. ショーンは、教員を含む現代の専門家は、それまでの科学的技術の合理的適用という実践原理とは異なる原理に基づき、複雑、不確実で価値葛藤をはらむ状況において実践を展開していると指摘し、従来の「技術的熟達者」に代えて、「反省（省察）的実践家」という専門家モデルを提示した。彼は、反省（省察）的実践家の知を、活動を行う対象の中に埋め込まれた無意識の知として捉え、それを「行為の中の知」と呼んだ。
2. 昭和 41（1966）年、ILO（国際労働機関）とユネスコによって、「教員の地位に関する勧告」が共同採択された。この勧告の適用範囲は、保育所や幼稚園から高等教育段階の修了までの公立の学校の全ての教員であり、勧告の第 6 項では、「教職は労働職とみなされるべきである」と宣言するとともに、教職を国家資格とするべきであるとした。
3. 昭和 40 年代は、教職志望者が急増し、「それデモ教師になりたい」、「教師にシカなりたくない」という、いわゆる「デモシカ教師」が出現した。しかし、こうした熱意と意欲を持った教員の中に、多忙やストレスなどからバーンアウト（燃え尽き症候群）に陥る者が目立つようになってきたことから、昭和 49（1974）年に「学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法」が制定され、勤務時間の改善措置が図られた。
4. 平成 21 年度に導入された教員免許更新制は、その時々で求められる教員として必要な資質能力を保持する一方で、不適格教員の排除を目的としたものである。これにより、平成 21 年 4 月 1 日以降に授与された免許状について、 10 年間の有効期間を更新して免許状の有効性を維持するには、 2 年間で 30 時間以上の免許状更新講習の受講・修了が必要となった。なお、受講対象者は、各地方自治体が取りまとめて各大学等に受講を申し込むこととされている。
5. 教育公務員特例法において、公立学校の新任教員に対しては、指導教員による指導・助言の下で初任者研修が義務付けられており、その期間は、条件附採用期間と同じ 6 か月とされている。また、平成 28 年の同法改正により、それまでの中堅教諭等資質向上研修が、在職期間が 10 年に達した教員を対象とする 10 年経験者研修に改められた。

【正答　1】

（社会学）

【No.　　】 マートン（Merton, R. K.）の社会学理論に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. 社会学における理論と実証とを統合するための指針として中範囲の理論を提唱した。同時代のパーソンズ（Parsons, T.）らが社会全体に関する統合的な一般理論の構築を目指していたのに対して、マートンは、まず経験的に検証可能な一定範囲の社会的事象の観察と、そこから得られた様々な命題を一般化した理論の構築を目指すべきであると主張した。
2. 予言の自己成就のメカニズムについて分析した。従来の社会学においては、例えばトマス（Thomas, W. I.）の議論のように、状況は人々が状況をどのように定義するのかによって形成されると考えられていたのに対して、マートンは、社会学における予言とは科学的な法則に基づくものであると位置付けた上で、人々の定義とは独立に自らを実現していくものであるとした。
3. 科学における資源配分の過程について分析した。同時代の科学社会学においては知識社会学的な視点が主流であり、科学の分野における業績評価は時代ごとの知識構造に拘束されると考えられていたのに対して、マートンは宗教倫理が業績評価と資源配分を公正化していく働きに注目し、これをマタイ効果と呼んだ。
4. デュルケム（Durkheim, É.）のアノミー概念を独自に拡張した。デュルケムは、ある社会の中で認められた文化的目標と、それを達成するために許された制度的手段との間に食い違いが起こるときに生じる緊張としてアノミーを定義したのに対して、マートンは、産業化の進展がもたらす欲望のあり方に注目し、それが無規制に肥大する状況をアノミーと呼んだ。
5. 準拠集団論を独自の方法で整理した。従来の社会学においては、自分の所属していない集団の規範・価値観を内面化する予期的社会化という現象が重視されていたが、マートンは、そうしたことは実際にはほとんど起こらないことを実証的に示し、準拠集団は所属集団と重なり合うと結論付けた。

【正答　1】

（政治学）

【No.　　】 自由と自由主義に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. J. ロックは、国家は生命、自由、財産の保全のために設立されたのであって、魂の救済を目的とする宗教とは厳格に区別すべきだと述べた。その上で彼は、政治権力が特定の宗教を強制したり禁止したりすることを批判し、プロテスタント諸派やカトリック、さらに、キリスト教以外のあらゆる宗教や無神論をも認める徹底的な寛容を主張した。
2. T. ホッブズは、自然状態において全ての人間は自己保存に対する権利としての自然権を平等に有していると述べ、自然状態で平和を実現するためのルールを自然法と呼んだ。その上で彼は、この自然法だけでは各人の間に対立が生じたときに確実に調停することができず、自然状態は戦争状態となることが避けられないと主張した。
3. J.-J. ルソーは、自然状態においてはそもそも人間は強者の支配に服する他はないため、いかなる自由も持つことができないと述べた。その上で彼は、社会契約によって人民自身が主権者となる政治社会を形成することによって、初めて人間は、自分自身の意志に従って行動する自由を手にすることができると主張した。
4. L. T. ホブハウスは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、大きくなりすぎた政府の役割を見直しその整理縮小を主張する新自由主義を提唱した。彼の主張は、存命中は必ずしも広く受け入れられなかったが、彼の没後に再発見され、一時世界を席巻したネオリベラリズムの先駆者として、再評価されることとなった。
5. I. バーリンは、自由の「消極的概念」と「積極的概念」という二つの概念を提示した。その上で彼は、消極的自由の本質を、個人が伝統的な社会関係から解放された結果生じた個人化にあると考え、こうした不本意な自由から逃れようとすることを「自由からの逃走」と呼び、それがナチズムなどの全体主義をもたらした重要な要因だと分析した。

【正答　2】

（国際関係）

【No.　　】 欧州統合の歴史に関する記述として最も妥当なのはどれか。

1. オーストリアのＲ．クーデンホーフ＝カレルギーは、欧州を舞台として甚大な被害をもたらした第二次世界大戦への反省から、戦後、欧州の統合による平和の維持と共同市場の結成を通じた繁栄を訴える汎ヨーロッパ運動を推進した。これを受けてフランスのＣ．ドゴール大統領は、アメリカ合衆国をモデルとした「ヨーロッパ合衆国」の創設による欧州の統合を訴えた。
2. 1952年に発効したパリ条約によって設立された欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)は、西ドイツ、フランス、イタリア、ベルギー、オランダ、デンマークの６か国を原加盟国とし、加盟国域内で産出される石炭と鉄鋼を共同管理することを目的としたものであり、以後の欧州連合(EU)成立に至る統合の端緒となった。この取組は、西ドイツのＲ．シューマン外相によって提唱されたものであり、ECSC の設立には西ドイツが強いリーダーシップを発揮した。
3. 1958年に発効したベルリン条約によって、貿易障壁の撤廃による自由市場の形成、共通の経済政策、加盟国間の生活水準の是正を目的として、欧州経済共同体(EEC)が設立された。ただし、加盟国間における具体的な制度の調整に時間を要したため、EEC加盟国による関税同盟の成立は、1986年の単一欧州議定書の採択まで達成されなかった。
4. 1967年に発効したブリュッセル条約により、欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)、欧州原子力共同体(EURATOM)及び欧州経済共同体(EEC)のそれぞれの執行機関(委員会)を統合して、欧州共同体(EC)委員会が創設された。この後、EC においては、英国等の新たな加盟による領域の拡大と、通貨協力の取組等による統合の深化が進められた。
5. 1993年に発効したマーストリヒト条約によって、欧州共同体(EC)を第１の柱、共通外交・安全保障政策を第２の柱、共通通貨の創設を第３の柱とするいわゆる神殿構造の EU が成立した。その後、2009年に発効したリスボン条約により、この構造は廃止されて更なる統合の深化が図られ、EU 域内市民の直接選挙による EU 大統領職が創設された。

【正答　4】